

# 新撰曲辰業書

農學市報壽編述

訂正 三

會友校前  
部書雜  
No.  
三二六四  
番号  
五

福岡第一師範學校  
(學校圖書)

分類 部	第	號
門		
部		
總記	歌	講論集
日		天
全	1	冊之内第 1 冊
分類 部	第	號
610.4		

225

T1A1  
61  
N38

農學士中根壽編述

# 新撰農業書

自明治九年十二月廿日至同王四年十二月十九日  
文部省檢定濟小學教科用書

文學社

新撰農業書卷之三

農學士 中根壽 編述

果木栽培篇

第一章 總論

果樹を栽培して果實を收むると、亦農家の事業の一なり、果實は、人體の滋養になる液汁を含有すること、頗る多きものにして、また食用品中の貴重なるものなり、○我が國ハ東北より西南ニ延び廣がりて、細長き邦なるが故に、栽培すべき果木

の範圍も亦廣くして、暖帶果木も、寒帶果木も、共に之の實を収むることを得るなり。○果木を繁殖せしむるには、果實を苗床にて育てあげて後、これを栽地に移し植うることあり、又挿木、接木、接芽、採木、接根など、稱ふる、諸種の方法ありて、果木の性質、土地の適否、氣候の寒暖等に從ひて、此等の法を用ふるときは、之の繁殖すること甚だ速なり、

挿木の法とは、蕃殖せしめんと欲する果木の強壯なる新條を切り取り、地中に孔を穿ちて、之を

差し込むを云ふ、この法は、果木を増殖するには、最も單一なる法にして、之の差し込みたる新條は、地中の濕氣の補助を得て、芽を發し、且つ小き葉を生じて、空氣の中より養分を吸ひ取りて、生長す之に依りて、新條も亦地中に根を生じて、其養料を取るが故に、自ら一個の果木と成りて、美良なる果實を結ぶことを得るなり、但し挿木太くして且つ強きときは、其成長も速にして、果實を結ぶの時期も、亦頗る早きがゆゑに、強壯なる新條を選びて切り取ること肝要なり。○挿木と

なすべき新條を取りて之を挿むには、秋冬ともに適候なれども、若し木質堅からずして寒氣の爲めに害せらるゝの恐あるか、又は土地に水氣多くして、冬に至り地水凍りて、土地脹れあがるの患あるときは、これを温にして、濕ある場所に圍み置き、翌春霜害の患なき時に至り、之を取り出して地中に挿むべし、而してその切り取たる新條は、三分の二程も深く土中に差し込み、能く近傍の土を踏み固め、以て樹液の乾くを防ぎ、尚ほ肥糞、樹葉或は苔等を其側に置きて、蒸氣の

減せざる様に注意すべし、

接木の法と挿木の法とは道理に於ては異なる所なけれども、只挿木は新條を地中に挿植し、接木は砧木ダキキに挿植するの別あるのみ、○接梢を砧木ダキキに挿植するときは、樹液循環して、異種の梢も之が爲めに生長して果實を結ぶに至るなり、但し接木をなすには、砧木も接梢も、共に木質強くして、損傷なきものを選び用ふるを肝要とす、○接木の法には、種々あれども、其中最も通常なるは、二法なり、第一の法は、砧木と接梢とを、鋭き小

刀を以て斜に切り、其切り口を再び縦に切り下  
げて、接梢と砧木とを互に箝め込むなり、第二の  
法は、來接と稱ふるものにて、砧木を横切になし、  
其中央より縦に裂き、又接梢の末端の兩面を斜  
に殺ぎて、之を砧木に挿し込むなり、○凡て樹液  
の循環は、皮と材質との間に在るが故に、接木を  
爲すときは、能く此理を考へて、接梢の皮と砧木  
の皮と相密接せしめて、接梢と砧木の液汁をし  
て、自由に環流せしむること肝要なり、而して既  
に接木し終らば、蠟を用ひて接ぎ目に塗り附く

べし、○右の第一の法は、接梢も砧木も、了の太さ  
の稍、同一きものを用ふるに宜しく、第二の法は  
太き砧木に接木するに宜し、凡て接梢は、秋冬の  
中に切り置きて春に至りて接木すべし、  
接芽とは、一の果木より新芽を取り來りて、之を  
他の果木に植附くるを云ふ、了の法は、先づ小刀  
を以て勢強き果木の芽を皮と少しの質とを附  
けて切り取り、これを植ふ附くべき本木の皮を、  
丁の字形に截り剥ぎて、之を植ふ込み、了の剥ぎ  
置きたる皮を以て之を覆ひ、柔軟なる藁を以て

新芽の周圍を縛り置き、その後藁を除き去りて、芽を距ること凡す二寸斗の上の處より本木を切りて、その勢氣を悉く新芽の方に注がしむる様にすべし、○接芽の法は、夏期樹液の循環の盛んなる時を以て施すを好しとす、而してこの法は挿木よりも尚ほ單一にして、其効を奏すること易く、且つ一回接ぎ損ずとも、再び接ぎ替ふることを得るを以て、大に利益ありとす、採木の法とは、小き果木に施す法にして、まづ横枝の低きものを曲げて、地上に溝を掘り、之を此

溝の中に入れ、土を覆ひて根を生ぜしめ、然る後に之を切り離して、別々の果木となして、植替ふることを云ふ、○この法は、秋間強健なる枝を選びて行ふを好しとす、但しこれを行ふには、兩手を以て枝を曲げ、これを地中に埋めて、堅く地を踏み附け、かつ股木を挿し置きて、其元に復するを防ぐべし、

接根とは、接木と同一の方法にて、梢を根に接ぐを云ふ、その法は、秋の中に根は三寸梢は五寸位に切り置きて、冬期家屋の中にて之を接ぎ、春早

く之を地中に植うるなり、

凡る果木を栽培するには善く土質を検査して、乾きて軽く肥沃にして深く且つ排水法の自然に行き届きたる土地を選ぶを必要とす。泥炭質又は海綿様の土地は最も柔軟なる果木に害あり、蓋し此の如き土質は、日中は陽熱地中に徹し易く、また夜に入りては消散し易くして、寒熱の變頗る急なるを以てなり。○果樹に施用する肥料は、一體に厩肥或は泥炭、樹葉類を木灰或は骨粉等と混和し、下層犁を用ひて、一尺以上の深さ

に掘り起し、十分に之を土に混して、耙耨を以て細に碎きたる後に植うるときは、大概の果木は、能く發育成長するものなり。○果木の栽培には、地形を監察すること、亦要なりとす。蓋し堅強なる果木は、地質と育樹の法とを得るときは、十分の好結果を得べけれども、軟弱なる果木に至りては、よく地形を吟味せざれば、寒氣或は霜露の害を被りて、大なる損耗を速くことあり、乃ち山間の低地は、高き所よりも、夜霜の害をうけ易きがゆゑに、高燥なる地所を選びて栽うべし、



又冬期烈寒の強風に當れる處には檜松等の如く、年中青葉の絶えざる樹木を並植して、之を防ぐを善しとす。

種子を苗地に育てたるときは、果木の種類に依りて、早晚之を移し植ゑざる可からず、凡て樹木の根の長さは、その地上に出でたる高さの概ね相均しきものにして、例へば、五尺の長さある果木なれば、五尺の根を四方に延ばし、二間の長さあるものなれば、其根も亦二間の長さにて、四方に蔓延するものなり、而して此樹根の極めて細

微なるものまでも、其儘掘り起して移し植うることを得ば、移植に依りて、生長を停止するの患は、甚だ少きことなれども、極微の根までも、切斷することなくして移し植うるは、甚だ難き事なれば、先づ果木を移し植うるときは、成丈け細微なるものまで掘り起す様に心掛べし、○樹木を移し植ゑて、往々其枯死するあるを見て、人或は怪むものあれども、其死せる樹木の根は、これを移し植うるるときに、甚しく切斷せられたるを見れば、其疑も忽ち氷解すべし、蓋し樹木を移し植う

るには、多少其細根を切り去るに非ざれば能はず、細根を切り去るときは、之に准して根の勢力減少し、根の勢力減少するときは、枝葉に上騰する水分の量も減少するが故に、枝葉の勢力も亦減少して、枝葉の凋衰を招く理なり、故に根を甚しく截り去るときは、枝葉全く枯死して、遂に舊に復すること能はざるに至るなり。○然れども、根を切り除くに准して、枝葉をも切り除くときは、甚しき損傷を爲さざるが故に、果木を移し植うるときは、前年發生せる枝々を、四分の一位ま

でに切り縮むるを通法とす、されど切り縮むるの度は、氣候の乾きたると、濕氣の多きとに依りて、變ずべきものにして、濕氣勝ちなる國にては、その切り縮むる度を少くすべきも、乾燥なる氣候にては、これを多くせざるべからず、但し樹木の葉を出し、芽を發したるときは、切縮むべからず、又成長の速なる樹木は、成長の遅緩なるものよりも、切り縮むる度を多くすると害あるまことなり。○凡そ果木を掘り起したる後は、能く細根を整理し、その掘り起したる根に泥を塗りて、直

接に外氣に觸れしめず、また穴を掘りて從來の如く、根を四方に擴げ、而して後之に篩にて篩ひたる土を振り掛け、水を濺ぎ、手を以て泥を根の間に押し込み、空所なからしめ、再び土を篩ひ掛けて、悉く根を埋め、終り尚ほ地面より二三寸も高く土を盛り立て置くべし、又新しく移し植ゑたる果木は、風の爲めに吹き動されて、根の底に空所を生ずるの患あるが故に、杓を打ちて之を支へ、或は一尺乃至二尺許も、土を高く根際に盛り集めて、風の爲めに動かされざる様に爲さ

ざる可からず、○凡し移植は、秋期木葉の落したるを待ちて爲すべきことなれども、軟弱なる果木は、春移し植うるを善しとす、また果木は、五六尺の長さに生長するを待ちて、移し植うるを常とす、而してこれに移したるのちは、培養を怠る可からず、

果木には、葉芽と花芽との二芽あり、葉芽とは、生長して葉を生ずるものを云ひ、花芽とは、生長して花を生じ、實を結ぶものを云ふ、凡そ果木に花芽多ければ、その實を結ぶことも亦多きが故に、

果木を栽培する者は常に花芽を多くして、果實を多く収穫せんことを務むべきなり而して花芽を多くせんには剪枝法を施すを善いとす剪枝法とは、新枝の一部を鋏み去りて、其勢を他方に向けしむるを云ふ但し剪枝の度は果木の種類に依りて、一様ならずして、或は新枝の三分の二位まで剪り去りても害なきものあり或は半分以上剪り取るときは、忽ち枯死するものあり、總て剪枝は芽の未だ發達せざる内に施すを善いとす芽既に發して後枝を剪るときは、必ず大

に果木の成長を傷ふものなりされども剪枝するの法を得るときは、これが爲めに花芽を増殖するのみならず、又果木の形容を粧ふことを得るものなり○果木は圓頭狀に作るもあり、又圓錐形になすもありて、圓き形を作るには、下枝と上枝とを鋏み切り、圓錐形と爲すには、下枝を延ばして、上枝を次第に切り縮むるなり、かく粧ひ造りたる果木は、外觀誠に美麗にして、目を悦ばしむべく、又果實を結ぶことも多かるべし、故に西洋の果木栽培者は、剪枝法を行ふこと最も多く

して、其果木の大小を論ぜず、大抵皆この法を施すなり。

## 第二章 林檎

林檎は、西洋にて果實の王と呼びて、廣く之を栽培するものにして、常に食用として美味あるのみならず、是より林檎酒と名づくる酒を製することあり、林檎に春種夏種秋種の三つありて、各酸味のもの、甘味のものあり、日本種は概して皆小にして、其質も亦遙に西洋種に劣れり。○凡る林檎は肥えたる真土に生長して、濕氣勝な

る土地を嫌ふものなり、故に良種の果實を選びて、其種子を洗ひ取り、肥たる苗地を見て、之を蒔き附け、春に至りて、之を栽地に移し、植ゑ、夏の來るを待ちて、之に接芽を行ひ、或は生長したる後之を掘り取りて、接根するあり、大抵林檎は此法を以て繁殖するを常とす。○接根は、冬の中、之を整へ置き、春に至りて、一寸斗地上より出卜て、これを植ゑ、植ゑたる後は、能く雜草を除去し、器械を以て周圍の地を度々搔き起して、輕鬆ならしめ、杭を立て置きて、その幹を真直にすべし。然

るときは、一年を経て、一尺乃至二尺の長けに生長し、二年目には、三四尺、三年目には、六尺乃至七尺にも生長するものなり、既に六七尺にもなるときは、移植するに適するが故に、肥沃なる土地を選び、種類の大小に従ひて、四五間づゝ隔て、之を植ゑ、丁寧に培養を加へ、その生長するに従ひて、時々剪枝法を施して、枝を切り縮め、或は芽を摘み切りて、その外形を作り、或は圓錐形に爲し、或は圓頭狀に仕立つるも可なり、但しその種類によりて、長けの低きものは、圓錐形となし、長け

の高きものは、圓頭狀に仕立つるを常とす、

### 第三章 梨

梨は、西洋にても、我が國にても、その種類甚だ多くして、人の賞味するものなり、我が國の梨は、水分多くして甘味寡く、西洋の種類は、水分寡くして甘味多し、梨も林檎と同しく、亦春夏秋の三種あり、また其形にも、圓きものと、圓錐物を倒立せるが如きものとありて、一樣ならず、○凡そ梨を植うるには、深くして且つ肥えたる、温暖の土地を選びて之を植うべし、また梨は、實蒔にして苗

木を作りたる後、之に接木或は接芽するを常とす。實蒔となすには、先づ地味深くして肥え、且つ少しく濕氣を帯びたる土地を選び、之に木灰、石灰、泥炭質物を施し、二尺位の距離に畦を作り、疎らに種子を蒔き、善く培養を施して、其成長を助くべし、而して秋に至りて之を掘り取りて、温なる處に移し、土を覆ひて寒氣の害を防ぎ、春に至れば、再び之を植ゑ替へ、夏の初に至りて、梨樹の善く根附きたるを見て、之を砧木となりて、良種の新條を取り、接木法或は接芽法を施して、其欲

する所の梨種を得べし、また二年目よりは、剪枝法を施して、圓錐形なりとも、圓形なりとも、我が思ふ儘に其形を作り、或は棚作、垣作など、稱へて、仕立つるもあり、而して棚作は、本邦にて多く行はれ、垣作は、西洋にて多く用ひらる。

#### 第四章 桃

桃樹は、其性質甚だ弱くして、寒氣に傷み易く、新芽霜に觸るゝときは、忽ち凍死することあり、故に氣候温和にして、寒濕ならず、深く豊饒なる地を選びて、之を作らざらばならず、○桃は、其生長

甚だ速にして早きものは、二年目に實を結ぶもあれど、大抵三年目を以て通常とす。桃も亦先づ苗木を仕立て、之に接芽或は接木法を施すべし。○苗木を仕立つるには、實り良き種を選びて之を碎き、其仁を取りて、一寸乃至二寸の深さに植うるときは、大概誤らずして發芽するものなり。或は仁を取りて、之に砂及び腐敗したる木葉類を混合し、薄く地面に廣げて、陽熱に曝し、芽を發せしめて後、これを栽うるも良し。これを栽ゑて後、生長したるときは、接芽法を施し、翌春に至り

直に之を排水の善き真土性の栽地に移し、植ゑて、三四間づゝ隔て置くべし。但しその土地は真土に限ることにて、礫土又は粘土などには、共に適應せざるなり。○桃を移植するには、枝を切り縮めたる後に移すを殊に肝要なりとす。而して移植したる後は、怠らず剪枝法を施さざれば、十分の収穫を得ること能はず。○桃は他の果木と違ひて、その勢力上部の枝にのみ走りて、更に横枝に及ばず。故に果實を結ぶにも、只枝々の上端のみに限りて、其數も少きものなれば、頻りに剪



枝法を行ひて、嫩き強壯なる枝を増加せしめ、以て大なる果實を多く収むることを求むべし。○桃の剪枝は、年々冬期か或は春早く、一年間に生長せる新條の半分を切り縮むるを善しとす。然るときは、圓形の奇麗なる桃樹を作ることを得べし。

### 第五章 柿

柿は、美味を有する果實にして、本邦にては廣く之を栽培して食用に供し、また澁柿よりは、澁汁を搾り取りて、諸種の用に供するなり。○柿は、暖

地の果木にして、嚴寒の氣候を嫌ひ、深くして肥沃なる粘土性の眞土を好むものなり、故にその苗木を作るには、能く熟したる大なる柿核を取りて、肥沃なる土地に蒔き置き、春芽の出づるころ、これを栽地に植ゑつけて、十分に肥料を施し、然して後、二三年を経れば、之を砧木となし、太き好味ある良種の新條を取りて之に接ぐべし。但し其接ぎたる木は、往々澁柿に變ずることあるものなれば、能く注意するを緊要なりとす。○柿の移植は、甚だ難きものにて、細微なる根までも、

意を用ひ掘り取りて、これに移し植うるに非ざれば、其効を奏せずして、枯死すること多し。○また澁柿の澁氣を去り甘柿となりて、食用に充つる法種々あり、先づ能く熟したる果實を取り、これを桶に入れて熱湯を濺ぎ、筵を以て桶を包みて、熱氣の減失を防ぎ置き、一夜を経るときは澁氣去りて良美なる甘柿とあるべし、之をさはし柿と云ふ又ころ柿と稱つて、皮を剥ぎて繩に挟み、日に曝して澁氣を除きたるものあり、頗る甘くして賞翫すべきものなり。

### 第六章 李

李には種類多くして、色の紅なるものと、紫なるものとあり、又味の甘きものと、酸きものとあり。○李は大なるよき核を選び、之を植ゑて苗木を作り、その苗木の生長したる後は、之を栽地に移し、接芽法或は接木法を施して繁殖せしむべし、但し接木は、春早く芽を發せざる内に行ひ、接芽は中夏のころ、果木の生長最も盛なるときを見て、之を施すべし、期に後るときは、其効を奏せざることあり。○土地は、粘土性の眞土を善しとす。

輕質の土地にては、その勢力弱きが故に蟲害を被り易し、李の稗弱なるときは、甚だ注意を要するものなれば、度々培養を施して、雜草を芟り除くを最も要用なりとす。

### 第七章 杏

杏は桃李に類したる美味の果實にして、夏の初頃早く諸果實に先ちて熟するものなり、杏は核を栽ゑて二三年を過ぎ、四五尺の長けに生長したるとき、之を移し植ゑて接芽すれば、以て良種を得し、又李或は桃を砧木となして、接芽する

ことあり、○土地は深く乾きたるを最上とす、○杏は、濕氣多き土地、又寒氣強き所には、よく生長せず、また杏の實は、蟲害を被ること多きものなれば、杏の實を結びたるときは、極めて注意せざる可からず。

### 第八章 梅

梅に花梅と實梅とあり、また花梅に、白梅、紅梅、一重、八重等あり、實梅には、豊後梅、信濃梅、其名高し、豊後梅は實大にして、信濃梅は實小なり、梅の實は、鹽漬梅干となして、使用するを最も多しとす。

梅の栽培養育は、總て李に均し

### 第九章 枇杷

枇杷は諸種の果實に先ちて熟するものにして、氣候温和なる眞土性の土地に生長す。枇杷に甘きものと、酸きものとあり、實り良き種類の子實を取り、之を栽ゑて肥料を施し育つるときは、多量の果實を結びて、利益を得べきものなり。

### 第十章 柑橘類

柑橘は、その種類甚だ多し、中に就きて、蜜柑、柚、橙、金橘、包橘等は、頗る貴重なるものなり。柑橘類は、

暖地の産にして、寒地には生長せず。○土地は粘土性の眞土を好しとす。種子は良種のものを選びて之を蒔き、土を覆ひてこれを踏み附け、旱の時は水を濺ぎ、冬に至れば、被覆を作りて寒氣を防ぎ、その一尺斗に生長したる後、之を移し植へべし。また枳木を多く植ゑ置き、之を砧木となして接木することあり。○凡て柑橘類は、甘酸の味を有するものにして、或は食膳に用ひ、或は菓子と製するに用ひて善きものなり。

### 第十一章 葡萄

葡萄は、その種類頗る多くして其色の黒きもあり、白きもあり、褐色なるもあり、その形は正圓なるものと、正圓ならざるものとありて、又早く熟するものと、晩く熟するものとあり、西洋にては我か國にては、廣く之を栽培して食用となし、又葡萄酒を製するに用ふ。○葡萄を栽するには、砂交りの眞土にして過度の濕氣を含まず、自然に排水の行き届きたる土地を善しとす。葡萄は實蒔挿木採木又は接木等にて、之を増殖すれば、その生長の速なるのみならず、其蔓を地中に埋む

るときは、其期節に至りて根を生ずること速なるものなり、故に挿木採木の二法を用ふるを常とす。○採木の法は、中夏のころ葡萄の蔓の地上に延びし時、其下の土に鋤を以て穴を穿ち二三寸の深きに蔓を入れ土を覆ひて能く均らし、氣候の乾燥に過ぐるときは野草類或は藪藁等を以て之を覆ひ、以て濕氣を保存せしむるときは、秋末に至りて埋覆したる蔓の節々より細根の繁生するを見るべし、然るときは之を掘り取り、一節づゝに切斷するときは、各一個の葡萄樹

新撰農書卷之三  
となるべし、之に能く防寒の保護を施して蓄へ置き、春分に至りて、葡萄園に植ふ附くべし、○挿木の法は、先づ本年に發生せる強壯なる枝蔓をば、秋に至りて、七八寸づゝに切り、各一個或は二個の芽を保たしめて、能く之を保護し置き、春に至り溝を穿ちて、此挿木を三寸位づゝの距離にて並植し、その初めよ、厩糞等を以て之を覆ひ置きて、濕氣を失はしめざるときは、挿木の節々より根を生ずべし、然るときに之を掘り出して、移し植うるなり、○葡萄を仕立つる方法は、氣候と

なれば、これを増殖するには、春早く鋤を以て、細根を切らざる様に掘り抜きて、土を振り落し、枯葉を取り除き、三尺計の距離に畦を作りて、一尺づゝ隔て、之を栽ふ、これに土を覆ひて水を澆ぎ、厩肥又は堆肥等を施して、濕氣を保存せしめ時々萬能或は馬鋏の類を以て耕耘して、雑草の生長を防ぐべし、○「ストローベレイ」は、横枝の蔓を發して、地上に蔓延すること甚だ多きがゆゑに、若し之を成育して、其數を増殖するの要なきときは、横枝の發する毎に之を切り去りて、土地

の養分を本幹にのみ送りやる様にすべし、又冬期には、藁或は木葉等を以て之を被ひて、寒氣の害を防ぐこと肝要なり。

第十三章 「カーラント」及「グースベレイ」

「カーラント」及び「グースベレイ」は共に西洋諸國にて廣く栽培する小果木にして、其實酸味なり。此果木は、性質健強にして生長し易く、その栽培も難からずして、夏早く多量の果實を結ぶものなり。○此二木は、共に挿木によりて繁殖するものにて、挿木法を行ふには、長さ六寸許に切斷し

て之を栽ゑ、冬になれば、藁を以て之を覆ひ、春に至りて之を取り去りて、能く培養を加へ、牛馬の糞料を與へ、剪枝法を施して、小枝を増加せしめ、以て果實を多く結ばしむべし。その實を結ぶは、多く二年目三年目の枝に在るが故に、古き枝は段々に切り取りて、新しき枝を増加せしむるを肝要なりとす。

第十四章 「ラスプベレイ」

「ラスプベレイ」は、深き真土に泥炭質物を混合して、之を栽ぐるを好しとす。砂性或は粘土質の土

地には發育することなく、○此果木は根附き易き故に採木にても容易に繁殖せしむることを得べし、但し此果木は初年に枝葉繁茂し、次年に果實を結びたる後は悉く枯死して翌年より又新に發生するものなれば、二年目に果實を取り終らば直に之を切り去り、翌年新條の發するときには其枝先を摘み止めて、横枝を發せしむべし、○寒氣酷しき處にては、根際に土を盛りて小山を作り、之に全樹を埋伏して、了の上た土を覆ひ、春に至りて之を除き去るなり、また寒氣酷しか

らざる處にては、此の如くにして、之を保護するときは、了の生長すること特に著し、

### 第十五章 山林

山林の事を考究するも、亦農家の事業の一なり、蓋し山林は、諸職業の盛衰に關すること甚だ大にして、山林なければ、常に薪炭の供給を欠き、諸器物製造の本源を失ふのみならず、山林を亂伐して、之に代ふるに新栽の樹木を以てせざることは、井河ともに枯れて、人畜穀菜共に水を得るに由なく、或は河海溢れて洪水を來し、或は山岳



の崩ろく如き天變地異を起すことありと云ふ故に農家たるものは山林の亂伐を防ぎ其保護を固くして其樹木を新栽することを怠らざるを緊要なりとす。○諸種の用に供して貴重なる樹木の中に就きて、楮、檫、榭、樟、櫟、楮、槐、栗、榛等は其性頗る堅緻にして暖地に植うるを好いとす之に反して、七葉松、黒松、赤松、五葉松、樅等は瘠土にも能く生長し、白楊、赤楊、桤、胡桃等は濕氣多き水邊の地を好むものなり。○山林は木實を植ゑて繁殖せしむることあれども亦挿木となりて培

育するもあり各樹木の原質に依りて變換せざるべからず凡て實植となすときは先づ肥沃なる苗地を選びて厩肥、泥炭、木灰、石灰等を肥料となしこれを混和して實を植ゑるの生長したる後これを栽地に移すを常とすまた挿木を爲すには強壯なる枝を用ふること肝要なり。○凡て山林は高山と原野との別なく土地氣候乾濕の度を考へるの適中したる樹木を植ゑ其法を究めて培養保護するときは廣大なる利益を収むることを得べし又風當りの暴き場所にては家屋

或は田園の周圍に、地質に適したる樹木を植ふるときは寒風を避けて、田畠家屋の害を防ぐのみならず、多くの歳月を経たる後は、大なる樹木を得べきなり。○樹木には、生長の速かなるものと遅きものとあれど、皆之を真直に生育せしむるを最も肝要なりとす。

### 特用草木編

#### 第十六章 綿

綿は我等の常に身に纏ふ所の衣服の原品にして、了の需用甚だ廣きものなり。綿に草綿と木綿

との別ありて、草綿の種實は黄綠色にして、軟かなる細毛あれど、木綿の種實は色黒くして光澤あり、熟れも耕作の宜しきを得るときは、多分の利を収むることを得るものなり。○綿は元來暖地の産なるが故に、暖地には善く産すれども、寒地には甚だ産し難きものなり、而して土質は豊饒なる沖積土を好むものなれば、之を栽うるには、地味深くして、且つ水氣の滯らざる處を選ぶを好いとす。○種子を蒔くには、春早くより、犁又は耙耨にて、地面を鋤き均らし、魚滓堆肥等を

十分に施し、五月の初に至りて、先づ木灰を水に投じて灰水を作り、これに種子を入れ、掌にて能く之を揉みて、種子に附着せる柔かなる綿毛を取り離し、然るのちに清水を桶に汲みて、種子を了の中に投じ、以て水面に浮び出つるものと、桶底に沈むるものとを別ち、了の浮び出でたるものを除きて、沈みたるもの、みを取り揚げ、三尺許の距離にて、地面に筋をひき、凡了一反歩に八升位の見積にて、疎密のなきやうに種子を蒔き、薄く土を覆ひて、上より之を壓し固め置くべし、然

るときは、十日或は十五日を経て芽を發すべし、○さて了の芽を發するを見て、密に過ぐる處は、これを間引きし、疎に過ぐる處は、新に栽え足して、先づ二葉三葉も出揃ひたる後に、小園をれば、萬能などを用ひ、大なる畝地なれば、馬鍬などを用ひて、耕し耘することを始むるなり、○凡了綿は、雑草の害を受くること殊に甚しく、且つ土地を細に碎くときは、了の生長上に著しき効驗を顯はすものなれば、幾たびとなく、耕耘を施すを肝要なりとす、○斯くて六月の末か、七月の初に

至れば、満園に花咲きて、見事なる景色を呈し、その後花散りて、桃状の實現はれ出で、その實の成長したる後は、遂に破れて綿毛を生ず、是に於て、八月の中頃に至り、綿毛の十分に成長せるを見て、漸次に摘み取りて、囊に入れ置き、綿繰器械にて之を精製したる上にて、世上に賣り捌くなり

### 第十七章 麻

麻は麻繩、綱などを製し、且つ麻布などを織立つる原品にして、頗る要用なるものなり、而して地味は深くして、豊饒なる真土に繁茂すれども、氣

候は、暖に過ぎ又は燥きすぎんよりも、寧ろ寒くして、濕氣勝なるを好しとす。○麻を下種するに、は、前年の秋の中に、犁にて土地を丁寧な鋤き返し、油糟、灰、廐肥などを混和して、肥料に用ひ、且つ冬間霜に暴いて、土塊を一層細末に碎き、翌春四月の中頃になりて、再び耕し、耘りて、耙耨にて能く均し、種子を撒き播きにして、土を以て薄くこれを覆ふことあり、或は五寸位の距離に、細き筋を作り、これに種子を落して、土にて覆ひ、軽くこれを壓し、附けて置くことあり、然るときは、數

日にして發生すべし、○既に發生して、二三寸の長さに至るときは、草を除き土塊を碎き、後間引きして、その勢の好きものゝみを残り、七月の中旬過ぎに至りて、麻實の稍熟して、下葉の漸く黄色に變ずるに至らば、手にて根よりこれを抜き採り、根を切り葉を掻き落して、小把となすなり。○麻の纖維を剥ぎ取るには、先づこの小把を熱湯の中に投じ、暫時にして之を取り出し、二三日の間、日に曝してこれを干し、復び清水に浸して後、筵或は菰の類を布きて之を積み重ね、席を

以てこれを包みて、自ら温蒸せしめ、而して後皮を剥ぎ取りて、麻挽臺と稱ふるものにて、其上皮を剥ぎ去り、麻の纖維のみを取りて竹竿に掛け、これを陰乾となすなり。

### 第十八章 亞麻

亞麻は、多量の有機物を含みたる土地を見立て、これを作るを好しとすされど、深き黒色の土地又は新に開墾したる處などを、最上の適地なりとす。○亞麻も麻と均しく、前年の秋の中に、深く土地を耕し、肥料をも多く施し置き、翌春下種

の前にも成るべく早く再び耕して一尺七八寸の距離に畦を作り一反歩に一斗五升より二斗位の割合にて種を下すを常とす○種子の芽を發したる後は時々耕耘を加へて雑草の發生を防ぎ八月頃に至り稍成熟せるを見て雄亞麻を抜き採り雌亞麻は了の黄色に爲りて種實の堅くなりたるを待ち其實を取りて其幹をも抜き採るなり而して後雌雄共に皮を剥ぎて織緯を取るべし

### 第十九章 藍

藍は染料の中にて甚だ需用の多きものなり○藍の種類は甚だ多けれども我が國にては唐藍丸藍蓼藍等の別ありて砂性の眞土に適するものなり○藍を作るには肥えたる苗地を選びて肥料を施し三月の初め頃に種を下し尚ほ尿水などを施して了の發育を促し了の苗の生長して五寸の長けに及びなば栽地に一尺づゝを隔て、畦を作り六寸乃至八寸の距離にて五六株づゝこれに移し栽ゑて水肥を施し日を経て屢之を鋤き耘り下種してより凡そ百五六十日を

經て、花の少く見ゆるを期として、蒔り取るを、  
一番蒔と云ひ、其蒔跡に培養して生長せしめ、三  
四十日を経て、再び蒔り取るを二番蒔と云ふ、ま  
た暖地にては、三番蒔までも爲すことあり、○藍  
を蒔り納むるには、好く晴れたる日に行ふを肝  
要なりとす、また蒔り採りなば、席の上に攤げ干  
として、莖と葉とを切り分け、莖を捨て、葉のみ  
を細に刻み、之を精製すべし、

### 第二十章 紅花

紅花も、また織物及び糸類を染むべき染料の一

にして、藍と同トく、貴重の用を爲すものなり、土  
地は、肥えたる砂性の真土を好しとし、肥料は、人  
糞、油糟、魚滓などを好しとす、○土地は、前年中  
に再三鋤き返して、肥料を十分に施し、春早く種  
を下して土を覆ひ、發生の後には、間引きして三四  
寸の距離となし、度々耕してこれが生長を助く  
べし、○花開きて稍、日を経るときは、天氣を見定  
めて、花を摘み取り、而して摘み取りたる花  
は、少さく刻みて白にて搗き、清水に浸して之を  
絞り、二三日もこれを攤げて陰乾となし、たる後

餅紅花となりて市に出すなり、

第二十一章 煙草

煙草は暖地の産にして、寒地には能く繁生せず、故に我が國にては薩摩、備前、肥後等の暖地の産を好しとし、米國にては、キユバ、ヴァルヂニヤの如き南方の産を上種とす、土地は温暖なる眞土性の豊饒なる處を最も適當なりとす。○煙草を栽培するには、先づ南方に傾斜せる、日當りの好き場所を選びて、苗地となり、能く腐れたる牛糞、豚糞、或は家禽糞などを全面に撒布し、犁にて鋤

き返して表土に混合せしめ、耙耨にて細に土塊を碎きて、地面を均らし、種子に木灰を混トて、三月中頃より、四月の初めまでに撒らし、蒔となすなり、然る後に、輕き輓軸を轉トて、一様に之を壓し、附けて、種子と土とを相接せしむるを好しとす、種子の芽を發したるときは、度々水を澆ぎて、地上濕氣の絶えざる様に注意し、又善く心を用ひて、雜草の生ずるを防がざる可からず。○煙草の栽地は、前年の中より、犁にて掘り起し、鋤にて地均らし、すべし、煙草は、取り分け耕作を精密に



せざる可からざる作物なれば、之を移し植ふる前にも、幾回となく、縦横に耙耨又は鋤を用ふるを肝要なりとす。然る後に、二尺五寸づゝの距離にて、萬能を以て土を搔き寄せて小山を作り、其上に小き孔を穿ち、六月の初頃、降雨の後か、又は曇りたる日を見て、苗地より苗を抜き取りて、一株づゝ、小山に植ゑ附くるなり。植附け終りて、根の附きたるときは、犁を以て植物に觸れざる様に、小山の周圍を耕し、又萬能の類を以て、雜草を芟り除くことに注意し、務めて土塊を碎きて、土

質を輕鬆ならしむるに非ざれば、煙草の繁生は望むべからざるなり。○煙草の害虫は、了の一本に生トたるを見れば、絶えずこれを殺して其驅除に注意すべし。煙草生長して、蕾の稍長トたるときは、了の先きを摘み切り、又横枝を生トたるときは、これを搔き取りて、了の勢を悉く葉の生長に向はしむるを好しとす。○秋の彼岸の頃より、葉の黄色を帯ぶるを見れば、鋭き小刀にて根際より切り取り、暫くこれを地上に伏せ置きて後、煙草小屋に運び入れ、これを乾して貯へ置くべ

ト

## 第二十二章 甘蔗

甘蔗は暖地の産物にして、寒地には生ぜざるものなり、故に印度地方などは多く良種の甘蔗を産す而して甘蔗に適したる土地は、燥きたる粘性の真土なり、○甘蔗を栽培するには、前年の中に先づ栽ゑ附に用ふべき甘蔗の幹の豊熟したるものを選びて、之を砂の中に貯へ置き、翌春三四月の頃に至りて、之を土中より掘り出し、一節又は二節づゝを附けてこれを切り、丁寧に栽培地

を耕して、これを横に伏せ置き、土を覆ひ軽く踏み附けて水肥を施すときは、二三週も経て葉を生ずべし、然るのちは、雑草の繁茂を防ぎ、耕作を怠らずして、十月十一月の候に至り、液汁の最も多きときを見定めて、幹先を切り去り、葉を取り除きて、土上より小刀にて切り取るなり、また種を採るときは、少く芟納の期を緩に、實の能く成熟して堅くなりたるを待ちて、蒞り納むるを常とす、○砂糖を搾るには、先づ芟り採りたる莖を壓搾器にて壓し、莖より汁を搾り、釜に入れ

てこれを煮、少量の石灰を投じて、了の上を生ずる所の泡を掬ひ去り、尚ほ能く煮詰めて、表面に浮び出づる雑物を去り、細き棒にて撥き回はして、幾度となく泡を掬ひ去り、其煮詰りたるを見て、幅廣き桶又は甕などに入れ置き、之を冷して結晶せしめ、以て日常用ふる所の白砂糖及び黒砂糖を製するなり。

### 第二十三章 蘆粟

蘆粟も、砂糖を製するに有用なる植物にして、暖地を好むものなれども、甘蔗よりは遙に寒き地

に栽うることを得るものなり。○土地は、砂性の真土にして、濕氣の度に過ぎて多からざる處を好しとす。又肥料は、魚滓、油糟、石灰の如きものを與ふべし。窒素質の肥料を多量に施すは宜しからず。○蘆粟を栽培するには、先づ前方より土地を細に破碎して、肥料を十分に施し置き、二尺許の距離に畦を作り、種子を疎に下し、土を覆ひて少し壓し附け置くべし。また芽を發したるときは、これを間引きして、一尺四五寸の距離に一二株を残し置き、度々耕し耘りて、了の莖の二尺餘

にも成長したるときは、根際に土を寄せ置くべし、而して十分に生長して、種實の未だ固らざる中に、之を地上より芟り取り、上部の一尺ばかりを切り去りて、搾汁器に掛けて之を搾るなり、その製糖の法は、甘蔗と大なる差異なし。

### 第二十四章 楮

楮は種類頗る多くして、土地の嫌ひは甚だ寡きものなれども、肥えたる粘性の真土を最上とす。○苗を仕立つるには、春早く強壯なる楮を見立て、其根を掘り出し、これを一尺餘に切斷し、二

三寸づゝ隔てゝこれを植ゑ、附以二寸許を土上に出すべし、而して周囲の土を能く踏み附けて後、水肥を澆ぎ、藁馬糞などを根際に置きて發芽せしめ、翌年の春に至り、栽地を耕鋤して、三四尺に一株或は二株を移し栽うるを好しとす。○さて移し植うれば、直に根際より截斷して、新に孽を發せしめ、秋に至りて土際より四五寸残して、これを丁寧採るべし、爾後亦毎年斯の如くすべし、而して切り採りたる新條は、これを小把となりて、湯釜の上にて蒸し、その十分に蒸し上り

たるを見て、皮を剥ぎ取り、これを干して製紙に用ふるなり。

### 第二十五章 漆

漆は稍寒き場所を好むものにて、水邊などは殊に善く發生するものなり。○漆を仕立つるには、先づ秋分に種子を取りて俵に入れたるの儘に水氣多き所に置き、屢水を澆ぎ、或は菘などにて、これを覆ひ温保するとき、少く青色を帯びて、發芽の徵あるを見るべし。これを度として、豫め耕作したる栽地に畦を作りて、疎密のなきや

りに種子を蒔きつけ、肥沃なる土を覆ひ、その芽の出でたる後は、日庇をかけて熱を防ぎ、又は水を澆ぎて濕氣を補ひ、注意して能く根の附きたるもののみを残し置き、餘は抜き去りて懇に培養し、その長け一尺三四寸に至らば、秋間降雨の後を見て、深さ五六寸の穴にこれに移し、植うべし。生長して五六年を経れば、脂液を採るに適するものなり。

### 第二十六章 茶

茶は我が邦の物産の中にて、最も廣く海外の諸

國に知られたるものなり茶には種類多けれ共概ね氣候温暖の地に非ざれば繁茂することなく、○茶は燥きたる沖積土を愛して、濕氣勝なる地質を嫌ふものなり故に茶を栽培するには氣候と地質との適否を考つて耕作すること、殊に肝要なれば頗る注意せんことを要す、○茶の種子は秋分善く熟したるものを選び、これを摘み採りて俵に入れ土中に埋め置き、藁菰の類にて温にこれを覆ひ、以て寒氣を防ぎ、春に至り芽の少く發するを見て、以前より深く耕鋤して

細に土塊を碎き堆肥或は厩肥などをよく混ト施したる肥沃なる栽地に、五六尺づゝ隔て、畦を作り、二三寸づゝの距離にて、四月の候にこれを蒔き附け肥えたる土を覆ひて、軽く壓し附け置くべし、○右の蒔方は、行蒔と稱ふるものにて、耕耘に便にして、風荒く寒氣酷しき所に用ひて宜し、又輪蒔と稱ふる栽培法あり、凡そ三尺許の距離に、徑一尺餘にして、深さとこれに均しき圓き穴を作り、穴の中の土を軟和にして、肥土をこれに入れ、塵芥、油槽及び糞尿などを多く施し、此

中に種子三十餘粒を輪形に蒔きて、一寸餘りも土を覆ひ置き、尚ほ其上に稗を振り掛くるを常とす。此蒔き方は、暖地に適するものにして、上質の茶葉を得るには、此法にて栽培するを最上とす。さて栽ゑ附けたる後は、其年の内に二三回も、尿水其他の水肥を澆ぎ施して、耕耨を加ふるをよとす。○茶樹は、甚しく風害又は霜害の患あるものなれば、茶樹の根際には、丁寧に糊糠又は穀類の藁などを寄せ集め、或は松杉の枝を立てて、これを保護し、以て成長を妨げざる様とする。

こと肝要なり、翌年も亦之に均しき保護を施し、三年目に至りて、新芽を摘み了の跡を丸く蒲鋒形に鋏み、刈り、輪蒔なれば、茶樹の周圍に溝を穿ち、行蒔なれば、行の間に溝を穿ちて、刈り草類或は油糟、人糞、尿水などを施し、四年目の春に至りて、摘葉の三十日程前に、人糞に水を混じりて、稀薄にし、たるものを施すと好しとす。然るときは、大に香氣を増すの効益ありと云ふ。○茶葉を摘むは、四月の候に、新葉の全く開き、らざるともの四五葉を摘むを始とす、これを一番摘と云ふ、摘みたる

る跡は丁寧これに拘り揃へ、三四十日を経て、再び新葉の發するを見て摘み採るを、二番摘と云ふ、凡て茶は初年には只一番摘のみを爲し、二年目よりは、二番摘三番摘をもなすべし、○茶を製するには、先づ釜に湯を沸し、摘み採りたる葉を、薄く蒸籠に擴けて、これを釜の上に据ゑて蒸しあげ、箸にて能く之を攪き回し、湯氣の全く廻りて、茶葉の悉く萎れたるを見て、之を取りあげて箕の上に擴げ、團扇にて之を冷したる後、焙爐場に於て之を製し、あぐるなり、焙爐は通常長さ一

間、横半間深さ半間ほどの爐にして、其中には藁火を焚き、上に厚紙にて作りたる助炭を据ゑ、此上に冷したる葉を薄く攤げ、掌にて静に之を揉み、從ひて揉み從ひて攤げて乾し、稍乾き終りたる後に、これを他の焙爐に移し、火勢を弱くして、尚ほ能く濕氣を除き取り、茶質を見こ、これを選び分け、或は篩ひ分けて、上下の二種、或は上中下の三種とするを常とす、○製茶には、紅茶緑茶などの別あれ共、その製法には、少しく異なる所あるのみ、



第二十七章 桑 附養蠶

桑は生系の原資にして、我邦の須要なる産物の一なり、故にその耕作に注意するは最も肝要の事なりとす。桑には早中晩の三種ありて、各土質と氣候とに従ひて、効能を異にすと雖も、概して桑葉は、柔にして大なるものを以て最上とす。○桑は寒地にも能く繁茂するものにして、我が東北の地方及び北海道も、亦多く美良なる桑葉を産す。桑に適應なる土地は、砂性の真土にして、空氣の流通宜しく、又日光の照射に妨なき場所

を以て、甚だ良好なりとす。○桑を蕃殖せしむるには、實蒔、採木、接木、挿木などの諸法あれども、採木の法を通常とす。採木の法は、先づ五六年を経たる、勢よき根株を選び、その孽七八本を残して、餘は悉く切り去り、孽ごとに五六の新芽を残し、孽の七八寸に生長したるとき、周圍の地に溝を掘り、これを曲げて土を覆ひ、股木にてこれを抑ふるなり。然るときは、新芽の長ずるに従ひて、根を生ずべし。根生長せば、これを斷して一個の桑苗と爲すを得ること、猶ほ果木の苗木を作るに

異なることなし。○栽地は、丁寧に耕し、耘りて、堆肥、廐肥などを多く與へ、春に至りて、桑苗を移植す。○桑を育つるには、根蒔、中蒔、高株の三法ありて、各土地氣候の異なるに隨ひて効あるものなり。根蒔とは、年々根際より蒔り取るを云ひ、中蒔とは、地面二三尺の處より蒔り採るを云ふ。根蒔中蒔ともに、四五尺の距離にて、二尺ほどの深さに穴を掘り、十分の肥料を其中に投じて、これに移し植うるなり。高株とは、五六尺乃至一丈許の處より蒔り採るを云ふ。この法は、三丈又は四丈

の距離に栽うるを好しとす。○桑は一年間に三四回も、人糞、堆肥、蠶屎の如き、勢強き肥料を施して、葉の數を多くし、葉の大きさを増し、且つ葉の性質を美良にすることを務めざる可からず。又雪國などにては、小枝の上に雪積みて、枝を壓し折らるゝこと、間々あるものなれば、冬期の近寄りたるときは、繩にて小枝を一處に結び附くるを好しとす。養蠶、蠶は、大に氣候の好惡に感下易きものなれば、氣候の順なると、不順なるとに依りて、蠶の

養法も亦随ひて變ぜざることを得ずと雖も、概して寒暖の變り易き處にては、絶えず炭火の力を借りて、蠶室の温度を平均にし、寒暖の急に變ぜざる様深く注意せざる可からず、是れ蠶の發生する初めには、殊に肝要なることなり。○蠶を養ひて良き繭を得、又よき糸を製するを得るは、第一に蠶種の良否に由るもの故に、種を選ぶを肝要なりとす。種は潤ありて紫色或は青色を帯びたるを好しとす。赤色にして潤なきをば選ぶべからず。○春暖になりて、好晴の日を見合せ、蠶

紙を取出して、暖風の吹き入る處に懸け置くときは、數日にして蠶種色を變じて青色となり、二三の蠶兒の匍匐して出づるを見るべし。然るときは、之を紙に包み、わらだ(わらだ)に編みたるものにして、徑三四尺ある圓き入れ物を、に入れて蓋をなし、蠶室に入れ、炭火にて室内を暖にすべし。翌日正午の頃に、之を開くときは、七八分通りも出でたるを見るべし。然るときは、桑の嫩葉を採り來り、細にこれを刻みて、包紙に附きたる毛蠶に振りかけ、養ふ可し。了の出残りたる分

は再び別の紙に包みて翌日同様に取り扱ひ、而して二三日を経て「わらだ」に移すべし。これに移すには能く「わらだ」を干して濕氣を去り、これに干したる糊糠を布き了の上刻みたる桑葉を振りて、これに毛蠶を紙上より撫で下すなり。○蠶兒に桑を與ふる度數は、初めには一日に四五回を度とし、稍成長せる後は、増して六七度ともなすべし。桑葉を刻むにも、初めは細にして、後には麤きを好しとす。又「わらだ」は、數日を経る毎に別なるものに取り替へて、蠶尿或は葉の喰殘し

などを悉く捨て去るを好しとす。而して「わらだ」を取替ふる毎に、其數を増して、「わらだ」一枚の蠶は、二枚の「わらだ」に移し、攤ぐる様にすべし。○蠶を撫で下してより、七八日を経れば、蠶兒は眠るものなり、これを初眠又は獅子の休と稱へ、一日一夜ほどにて起き揃ひ、三四日を経て、再び眠むるを二眠或は鷹の休と稱へ、三眠を船の休、四眠を庭の休と稱ふ。蠶の眠に就きたる間は桑を與ふることを止むべし、また起きたるもの數多ありとも、悉く起き揃ふまでは桑留と稱へて、桑

を與ふることを止むるを善しとす。○蠶の三眠四眠の頃は最も大切なる時なれば、桑葉の質の良きものを選びて、澤山に之を與ふべし、了の雨に濕れたるもの、及び虫の喰ひたるものは取り除くべし、又熱のさめざるものを直に與ふことも宜しからず、此等は殊に養蠶家の注意すべきことなり。○蠶兒の四眠より起きて七八日を経る時は、全く食慾を絶ちて、蠶身透明になり頻りに畱ひ廻りて、繭を作るに便なる所を捜すものなり、この時は「わらだの上」に「まぶ」を造りて、透

明なる蠶兒のみを、手にて静に取り揚げて、うの中に入れ、棚の上に揚げ置く可し、然るときは、蠶此中に在りて繭を作り、六七日を経れば、化して蛹となるものなり。○是に於て、わらだを棚より下して、繭を取り離し、種繭と糸繭とを選び分け、糸繭は「わらだ」又は席の類に廣げ、日に曝して之を干し、あげ、或は蒸籠に蒸して蛹を殺し、而して後に、これより生糸を製すべし、又種繭は「わらだ」に入れて、日の當らざる暖なる所に置くときは、蛹化して蛾となりて、繭より出づるものなり、然

新撰農業叢書卷之三  
るときに、これを紙上に取りあぐれば卵を産す、これを厚紙に附したるを種紙と云ふ、種繭を選び分くるにも、亦意を用ひて黄種なれば、極めて黄色なるを選び、白種なれば、極めて白色なるを選び、○蠶には春蠶、夏蠶、秋蠶、天蠶、野蠶などの種別ありて、今記せるは、春蠶の養法なり、他の種類も、養法了の宜しきを得るときは、大に利益を獲取することを得るものなり、世の養蠶家たるものは、善く養蠶の法を究めて、これが改良進歩を務むること、頗る肝要なり、

### 農家の經濟

徒費浪用を省くに非ざれば、事業の擧らざるは、獨り農業のみに止まらざれども、農業に於ては、殊更に之に注意せざる可からず、何となれば、農業に於ては、浪費の途最も多ければなり、○第一、土地に就きて、最も意を注がざる可からず、即ち土地の瘠薄ならざる様に、務めて肥料を十分に施して、其肥沃を維持すること肝要なり、○第二、肥料は、吾人の衣食を製造する原物なれば、十分の肥料を田畠なる製造場に送與するに非ざれ

ば潤澤に吾人の衣食を得ること能はざる理なり故に何物に限らず農場中の不用物は悉くこれを堆肥中に投じ能く熟せしめて後に施用するときは忽ち不用物を化して有用物とならむべし然れども肥料熟するときは緊要なる瓦斯を四方に飛散せしめ或は又雨水の爲めに要用なる液汁を流失せしむることあり故に瓦斯の飛散は乾燥せる土を覆ひて之を拒ぎ液汁の流失は堆肥の上に屋根を設けて之を防ぐべし

○第三年々穀菜を浪費する量は實に夥しく

て、之を一國に見積りなば、巨大の富を雲霧に附することあらん是等は皆農家の不注意より起る事なれば、農家たるもの、各自ら少く反省するときは、大なる利益を一國に與ふべし、了れ穀菜の浪費は、收穫の時に於て最も多くして、或は其時を得ずして收穫するが爲めに、未熟のものを収むることあり、又過熟のものを収むることあり、或は貯蓄其法を得ずして、黴を生ずるが爲めに、大損を爲すこと有り、是等は、皆農家の損益に關する所なれば、特に注意すべき事なり○第

四、雜草の芟除をば怠る可からず、○第五、農家は務めて徒勞せざる様に注意すべし、何事を爲すおも、先づ腦力を惜まず、最小の勞を執りて最大の功を奏せんことを求むべし、○第六、農家に使役する家畜をして、過度の勞動を爲さしむるは、眼前にては利あるが如くなれども、終に至りて其得策に非ざることを見出すべし、蓋し過度の使役を受けたる家畜は、全身の勢力を使ひ盡すに依りて、適宜の使役を受けたる家畜に較ぶれば、壽命短くして、永く主人の使役に應ずること

能はざればなり、又農家の使用に供するには、甚だ老衰せるもの、若くは幼弱なるものを畜ふ可からず、蓋し老いたる者は、仕事果敢取らず、幼きものは、十分の仕事を就すこと能はざるのみならず、大に將來の生長に害あるものなれば、能く生長したる家畜を使役するを肝要とす、又家畜の種屬に依りて、勞役に適するものと適せざるものとあり、即ち牛には乳牛、役牛、肉牛の別あり、又馬には勞馬と乘馬との別ありて、其用各異なるが故に、乳牛、肉牛を役牛として、田畝に使役し、



或は乘馬を勞馬として、器械荷車などの運轉に  
使用するは、宜しき事に非ず、田畝に使役するも  
のは、必ず役牛若くは勞馬に限るべし。○第七器  
械は、倉を作りて、一々之を納め、以て雨露の害を  
禦ぎ、これを田畝に使ひたる後は、能く之を拭ひ  
て、銹の生ずるを防ぐべし。總て農用器械は、其大  
小を論ぜず、輕くして使ひ易きものを購求すべ  
し。蓋し農器の輕きと重きと、其使ひ易きと使ひ  
難きとは、仕事の進むと進ざるとに依りて、大に  
農家の經濟に關するものなればなり。○第八家

を作るには、一度に大金を投じて、堅固にして永  
久に保存すべき家屋を造築すべし。初めには益  
なきが如く見ゆれども、後に至りて度々修繕す  
るの費なく、また家畜小屋は、能く空氣の流通と、  
光線の照射とに差支なからしめ、且つ濕氣を去  
り、惡臭の來襲を拒ぎ、畜類の病患を醸すの患  
なからしむべし。○第九農家に二種類ありて、自  
ら土地を有して、其土地に耒耜を執るものと、自  
ら土地を有せず、他人の土地を耕して、其所得を  
配分する者、即ち小作人とあり、此二種の農家は、

一國農業の進歩に係ること頗る大なり、此中孰れか最も一國の農業を盛ならしむる者と云へば、諸説紛々として一に歸せずと雖も、多くは第一種を是として、第二種を非とするもの、如し其何故たるかを概言すれば、農家土地の所有權を有するときは、之が爲めに費す所の勞力及び注意を加ふること愈多くして、土質を改良し、生産力を増殖せんとするの念益増加するに由るなり、故に農家は宜しく田畠の所有權を得ることとに心懸くべきことなり。

新撰農業書卷之三大尾



明治十八年七月十四日版權免許  
明治十九年三月 出版  
同 年十二月十三日訂正再版御届

札幌縣士族

編述人 中根 壽

東京水郷區菊坂臺町  
二十四番地

出版人 文學社

東京日本橋區本町四丁目  
十六番地

